

## 2名集団によるふり遊び過程の分析（5）

### An Analysis of Dyadic Pretend Play Process (5)

菅 野 幸 宏\*

Yukihiro KANNO\*

#### 論文要旨

ふり遊びの内容がいかに発生するかを調べるため、幼稚園児2名1組による集団遊びを観察した。今回は5回目の報告として年中組第4ペアを取り上げ、特にふりの交渉に関わる相互作用スキルに着目しながら検討した。今回のペアではふりの枠組を交渉する際に役割を抜けて提案する方略が特徴的であった。ほかに新しい問題として枠組構成を提案するときの表現の違いを取り上げた。

キーワード：幼稚園児，2名集団，ふり遊び，相互交渉技能，枠組構成と演技的表現

#### 目 的

遊びの発達心理学的研究においてふり遊びは中心的な領域をなしてきた。本研究はこのふり遊びの内容が集団においていかに成立していくかを明らかにする目的で計画されたものである。この目的のため同性同年齢児から成る2名集団を構成し、彼らのふり遊びを観察し、微視的に分析することとしたが、これまですでに4事例（最初の2事例は年長児ペア，次の2事例は年少児ペア）の分析を終えた（菅野，1997<sup>2)</sup>；1998<sup>3)</sup>；1999<sup>4)</sup>；2000<sup>5)</sup>）。その結果，これまでのところ，遊びの内容の成立には，1）遊びに使える物の情報，2）関心の深い魅力的な主題の着想，3）遊び相手のふりへの関心，4）ふりを演じる際にとる役割の魅力，5）魅力的な玩具，遊具の配置，6）ふりの交渉に関わる相互作用スキル，7）遊び相手の熟知性といった要因の関連が見出されてきた。KとMの3歳男児ペアを扱った前回は特にふりの交渉に関わる相互作用スキルに焦点を置いて考察したが，遊びの枠組みの交渉において彼らは役割を抜けた素の自分のままで行なう場合が多く，役割についたままの交渉は少ないという特徴が見出された。これらの特徴が3歳児ペア一般に拡大されるという保証はないが，ふり経験の少ない3歳児の一般的特徴である可能性も残されている。いずれにせよ，ふりの交渉に関わる相互作用スキルは年中児ペア

を取り上げた今回の分析でも注目していかなければならない。

#### 方 法

方法については，スペース節約のため菅野（1979）<sup>3)</sup>に詳細を委ねることとし，ここでは必要最小限の記述にとどめる。

対象児：幼稚園3年保育年中組の女児M（5；2）と女児K（5；3）のペアが対象である。このペアは年中組（4歳児組）第4ペアにあたる。面接によれば，双方とも相手を普段よく遊ぶ相手と見ていた。

手続き：大学の先生とお話をするため保育室で待ってもらふこととし，待ち時間の二人の行動をビデオカメラに記録した。あらかじめ一定の玩具等を用意しておき，待っている間にそれを自由に使ってよいという形で遊びに誘ったが，保育室に備えてある玩具等の使用も自由とした。

時期と場所：1990年7月16日（月）H大学教育学部附属幼稚園保育室において撮影した。

#### 結 果

結果の分析は，観察（VTR）によって収集した音声・映像資料を文字資料に転記し，これを要約した上で解釈するという手順で行われた。

転記においては言語的行動のみならず非言語的行動も含めることとし，ペアが入室し教示を受け

\* 弘前大学教育学部幼児教育学科教室

Department of Preschool Education, Faculty of Education, Hirosaki University

た直後から面接のため退室する直前までを範囲とした。結果として今回のペアの撮影時間は15時16分から38分までの22分間であった。資料の記述においては言語的行動に「」をつけ、非言語的行動は何もつけずに記すこととし、適宜説明を加えた。「行動の記述」欄の左端にある○は行動の主体が誰であるかを示し、左側がM、右側がKである。01などの数字は幼児が興味を向けている対象または話題を単位として関連行動を括った番号である。

要約（概要欄に記載）は上述の興味単位毎に行ったが、遊びの過程を把握しやすくするため、遊びの主題やエピソードの開始と終結、遊びへの加入と離脱などを考慮していくつかの単位をセクションとしてまとめることにした。今回の遊びの過程は12セクションに区分された。

#### 年中組第4ペアの活動プロセス概観

§ 1；これは、玩具箱から玩具等を次々と取り出し、遊び道具を探索しているセクションである。なお、今回はM、Kとも入室後教示を待たず、直ちに玩具箱の探索を始めてしまったため教示時点では既にレジなどが箱から出された状態であった。

§ 2；これは、ふり遊びの枠組を構成する行動がみられたセクションである。探索的行動も少なくないが、ふり遊びにおける役割配分が現れ、ふり遊びへの意欲が高まっている。

§ 3；これは、§ 2に続いて診療に関わる演技的行動が出現したセクションである。枠組構成と演技を交えながら進行していく。一通りの診療行為が演じられた時点で区切りとした。

§ 4；これは、Kにおいては診療行為に関連のある行動が続いているものの独語的になり、Mの興味を引きつけられず、結果として共同のふり遊びが崩壊したセクションである。

§ 5；これは、コーヒーを入れるふり遊びが出現したもののMの能動的な参加がなく、事実上K単独のふりに留まったセクションである。

§ 6；これは、駅にまつわるアイディアが出現したセクションである。ただし、幼児の興味が切符切りを使ってみること自体にあったため、ふり事象の演技は見られず、断片的な枠組構成が2回ほど認められただけであった。

§ 7；これは、§ 3の診療Iをより簡略にした形で反復したふり遊びがみられたセクションである。

§ 8；これは、主として赤十字腕章をめぐる探索的な行動が見られたセクションである。

§ 9；これは、駅事象に関する役割配分が見られたセクションであるが、演じるより切符を切ること自体に強い興味を示したと言える。

§ 10；これは、主にレターをめぐる現実的な会話が見られたセクションである。

§ 11；これは、ふりの要素を持たない感覚運動的な遊びが現れたセクションである。レジが開くときに入れてあったコインが跳び出し、これをKが大いに面白がったのである。

§ 12；これは、§ 5のコーヒーIの継続を成すふり遊び活動が現れたセクションである。§ 5でつくられたままになっていたコーヒーを飲ませることになる。

全セクションの「行動の記述」を記載するとあまりに長大になる。共同のふり遊びの成立という点からみて重要なのは、医療事象に関するふり遊びが出現した§ 2、§ 3、§ 7並びにコーヒーに関するふり遊びが出現した§ 5、§ 12であるから、以下ではこれらのセクションのみ行動の記述（テキスト）を示すことにした。なお、§ 2と§ 3には実線で下線を引いた部分と破線で下線を引いた部分があるがこれについては後で説明する（考察参照）。

#### § 1 遊び道具の探索

■テキスト：（省略）

■概要：ここでの行動は、Mがレジをいじり、Kが箱から電話を取り出す時点から始まる。その後の両者の興味対象は以下のように推移した；

【M】01) レジー—02) 電話—03) 診察セット—06) 診察鏡—08) 電話—09) 腕章—10) 氷枕—11) 何か1—12) 何か2—13) レジ—15) 切符切り；【K】02) 電話—04) ハウス—05) 恐竜—07) 聴診器—09) 腕章—10) 氷枕—12) 何か2—13) レジ—14) 何か3—15) 切符切り。なお、片括弧の番号は興味対象の出現順を示し、[ ]内は単に受動的に関わったと見られる対象である。また、「何か」という表現は、それが何らかの対象であることしか確認できなかった場合に用い、出現順に番号を振ってある。

■解釈：これは玩具箱内の対象を探索し、遊びのための情報を蓄積していくセクションと見られる。興味を向けられた対象のうち両者が同時に興味を示して関わった対象は、02) 電話、09) 腕章、10) 氷枕、12) 何か2、13) レジ、15) 切符切り、である。そのうち02) 電話は、電話を使って遊戯的にやりとりしたと見られるが、役割を採

ったふしはなく、やりとりはごく短い。興味の中心を考えると、やりとりよりもむしろ電話のボタンを押して音を出す方にあるようである。よって、この行動はふり遊びというより対象操作の遊びという性格を持っている。02) 電話以外の対象では、その対象が何であり、どう使うものであるかを詮索する行動に終始している。

## § 2 枠組づくりの出現

■テキスト：以下の「行動の記述 § 2」に記載。

■概要：まず、Kは「人形」を風邪をひいて寝ている人として設定し、Mの了承を得る(01)。さらに箱の中を探ると何かが見つかり、これは「薬」だというMの説明を受け入れ、手前に置いておく(02)。その後つぶやきながら「薬」や「水枕」をあれこれを置いていくが(04, 05)、その間Mは「何か1」(03)や「聴診器」を取り、聴診器については耳にかけるとコメントする。これに対してKは「知ってますよ」と応答する(06)。Kは引き続き「体温計」(07)や「何か2」を持ち、その配置を考えている様子であるが(08)、Mはレジに興味に移り、お金がいっぱいある人のイメージを思い浮かべている(09)。この後KからMに役割配分の提案があり、Mの了承を得る(10)。

■解釈：§ 2はふりに関する状況設定から始まっている(01)。これはここで突然思いつかれたと考えるよりも、§ 1で診察鏡、聴診器、腕章、氷枕、鋏(切符切り)にふれ、医療事象に関するイメージの蓄積があったからと考える方が自然であろう。特に、§ 1の最後(10)で「鋏」(切符切り)に対してMがお医者さんで使うものと説明したことは、それが01の直前であり、01が「じゃあ」という言葉で始まっていることから推して01を引き出す契機になったものと見られる。

以後再び探索行動やK単独のふりの状況づくりとおぼしき行動が続いた。これは、幼児らがまだふり遊びの準備中であることを示している。

共同での明確な枠組構成が再び行われたのは最後(10)においてであったが、これはMの役割を設定するものである。Mは、お客さん(患者)と注射する人(実際は、注射される人)になることを了承した。ここに両者におけるお医者さんごっこへの意欲の高まりを見ることができる。

## § 3 診療Ⅰ～演技の出現～

■テキスト：以下の「行動の記述 § 3」に記載。

■概要：KがMに体温計を渡して体温を計るよう求めると、Mはこれをシャツの中に入れよう

と(現実に近いやり方をしようと)したので、簡略に(「うそこに」)やるよう要求する(01)。その後Kは聴診器をつけ、Mに呼ばれるまで待っているよう求め、呼ぶ。Mが返事をする、体温を読み上げ、中へ呼び入れようとする。Mは実際には行かず、言葉の上で行ったことにし、Kは了承する。それから、Kは聴診器が外れやすいのでMに押さえてもらいながら、聴診器をMの腹部、背中に当て、診察行為を終える。少し待たせてから(02)、Mに薬を渡し、飲むように言う(03)。

両者はKが箱から出した皿(04)、それからポットについて(05)現実的な会話を交わすが、その最後にKはポットにお湯が入っていることにする。

Kは注射器を取り、Mに痛いところを尋ね、注射行為を行う(06)。

■解釈：01(テキスト②の発話の後の体温計を振る行為並びに③の発話)では医療事象に関する最初の演技が出現した。以下KはMを患者として、体温を計らせ、聴診器で診察し、薬を出し、痛いところに注射をするという一連の遊戯的な行為を行なった。これらの遊戯的行為は枠組構成と演技から成っている。比較的簡略ながら一通り筋の通ったお医者さんごっこが出現したといえる。薬を出す行為と注射行為の間に玩具に関する現実的な話題での会話が挿入されたが、これは本幼児が知覚的印象に影響されやすく、目的追求性の不安定さを示していると言えようか。

## § 4 診療ⅠからコーヒーⅠへの移行

■テキスト：(省略)

■概要：簡略ながら一通りの診察行為を終えたKは体温計を取り、名前を呼び、置く(01)。それから、奥の方に向かって何かがMの方に行くことを伝え、薬は持っていき、お湯(ポット)は持って行かない、といったことを言いながら診察セットにいろいろと詰め込む(途中カルテを取るがすぐ戻す)(02)。そのときMがレジをいじり、Kに注目するよう求める。Kは返事をするが(03)、Kの注意は診察セットから離れず、そこから何か取り出し、持っていけないと言う(04)。この後もMから電話を使つての働きかけがあるが、Kは待つてと制止し、カルテを診察セットに詰め、これの下に置く(06)。このとき誰かの声を聞き何かつぶやくと(07)、Kは電話に注意を移し、Mの制止にも構わず、取ると、風邪をひいている人がいるので誰かの家に行くと電話し、早速行ったことにし、これはMの了承を得る(08)。

Mはレジをいじり(09)、何事かつぶやく(11)。その間Kは箱の中を探っていたが(10)、ハウスの屋根を見つけ、これを本体にかぶせてみる。このとき、KがMの名前を呼んでいたので、Mは返事をし、ハウスに注意を向ける。そして屋根がぶかぶかだと言ってKが戻したハウスを手にする(12)。次にKが箱から人形を出し、これをピエロと呼ぶが、ピノキオだと言うMの意見に同調する(13)。

この後、Kは突然「来たんだ」(14)と言い、電話を使うが、長くは続かず、結局Mに電話を渡す。この間Mはハウスをいじったり箱をのぞいたりしている(15)。その後Kは皿を出し、ここで遊ぼうねと言い、ごちそうを食べる皿だと宣言する(16)。その時Mがコップ(カップ)を出し、両者はこんな変なコップがあるかなどと話し合う(17)。

■解 釈：§3で診察行為を終え、Kは満足した様子である(01)。その後Kは奥の方に何かが行くというような診察行為に関連した設定を行うが、Mの反応を確かめることもなく独語状態になっていく(02, 04)。一方、Mはレジや電話を使い、Kに働きかけ、自分の行為に注意を引こうとしている(03, 05)。Kは応答はするものの積極的ではない(03, 06)。こうして§3で見られた共同のふりは崩壊し、K単独のふり行為が継続しているだけになる。その後2回ほど§3からの続きと見られる演技的発話が見られるものの、Mが消極的に応答するだけなので続かない(08, 14, 15)。それ以外にふり行動はなく(09~13, 16, 17)、全体にふりの雰囲気希薄な状態になる。

## §5 コーヒー I

■テキスト：以下の「行動の記述§5」に記載。

■概要：§4の16, 17で取り出された皿とコップを前にしてKがコーヒーを入れるふりを提案すると、Mはこれを了承し(01)、スプーン(02)や別のカップ(04)を取ってKに渡す。Kはこれを受け取り、砂糖(02)や塩(03)を設定し、砂糖やお湯をカップに入れ、かき混ぜ、できた様子で「コーヒー」と言う(04)。

Mが箱からハウスを取るとき(05前半)、Kがコーヒーカップに乗ったことがあるかと現実的な話題を出し、Mは分からないと答える(06)。その後、Mは箱から取ったハウスの屋根と本体の大きさが合うことを発見するが(05後半)。KはMのそうした様子に構わず、コーヒーを差し出し、後で飲むように言って下に置く。しかし、Mはハウスの内部に興味を持ち、Kに見せようとしている(07)。

その後、Kは箱から食べ物を探そうとし、Mも箱をのぞく(08)。Kが箱から白柵を出して皿に載せ、皿にしまっておくことにすることを言い、Mに了承される(09)。するとMがおはじきを発見し、ハウスの中に入れる(10)、その後、Kは皿をいじったり(11)、何かを取り出し、ハウスに入れたり(13)し、Mは紙を見ついたりしている(12)。

■解 釈：§4で見出された皿とコップからKに浮かんできたコーヒーを入れるというふりのアイデアがMに伝えられ、受け入れられた。そこで、スプーン、砂糖、お湯が設定され、これらを入れてかき混ぜることでコーヒーができた(01~04)。KはこれをMに差し出すことになるが、その前にコーヒーカップの話題を出すと、Mの興味はすでに箱の中に向いていて、そこにあったハウスの屋根と本体のサイズがぴったりであることを発見し、Kにも知らせようとする。しかし、Kはこれに構う様子もなく、コーヒーを差し出す。こうして、互いにちぐはぐであり、Kのふりも盛り上がっていかない。その後、Kは食べ物を加えようと考えたようであるが、箱の中に食べ物は見つからなかった。それから取り出され、皿にしまっておかれた白柵は食べ物のつもりであったのだろうか。はっきりした証拠はない。その後幼児たちはおはじきや何かを取り出したり、紙を見ついたりした。

以上から、ここではコーヒーを入れるふり遊びが出現したものの、Mの能動的な参加はなかったから、結局K単独のふりに留まったと言えよう。Kのふりの内容はMに了承されてはいても共有されるまでには至らなかったと見られる。

## §6 切符切り I ~駅のアイデア~

■テキスト：(省略)

■概要：Kが袋に入った紙を見つけ、買わなくちゃと言うと、これに要らないというM(レジにふれたりする)の発話が付く(02)と、Kは要るんだと反論し、Mが見ている中(03)これを切符切りで切ろうとする。しばらくして切れた音がし、切れたでござるという発話があると、すでに箱の中に興味を向けていた(04)Mが再びKを見る(05)。この後Kに満足気な独り言(歌唱調)がある(ここまで01)。Mが箱から白柵などを出し(06)、またレターを見つけると、これがKの注意を引き、書いてみようかなどの発話が出る(07)。その後それぞれ手元のものをいじっていると、KがMに話しかけ、何か1が駅からきたことにしてMの了承を得る。Kは左手に行き、カップをスプ

ーンでかき回す動作をする。その間「駅から来た」というMのつぶやきが聞こえる(08)。Kはその後診察鏡を見つけ、これを使おうとMに働きかけるが、Mは箱の中を見ている。そうしている間に診察鏡がずり落ちてしまう(09)。廊下を通る人がいて両者一瞬気を取られる(10)。Mが箱の中に目を戻し、食べ物が少ないことをKに伝え、Kはカップなどにうそこに(食べ物が)あることにし、Mに了承される(11)。

■解 釈：Kは紙を見つけ、これを切符切りで切ることに興味を示した。後にKが駅にまつわるアイデアを思いつくが、それにはこの経験が影響したものと思われる。一方、Mは主として箱の中の探索に終始したと見られるが、特に食べ物になるものを探していたようである。そしてそれが見つからなかったが、Kはこれを「うそこにある」として解決し、Mも了承している。

ここでは、ふり事象の演技は見られず、枠組構成が2回ほど認められたが、いずれも断片的であり、直ちに発展することはなかった。駅にまつわるアイデアが発展しなかったのは、ふり事象を演じるよりも切符切りで何かを切る方に強い興味があったからと見られる。

## § 7 診療Ⅱ

■テキスト：以下の「行動の記述 § 7」に記載。

■概要：聴診器を手にして「診るから」というKに対して、Mは黙って指示通りに動く(01)。聴診器を当てる動作を終えると、Kは診察セットを探り、「その薬を飲めば直る」と伝え(02)、それから注射をすると述べ、Mの腕にそれらしいことをし、「はい、いいですよ」で終わる(03)。

■解 釈：Mの参加のもと、Kは診察し、薬を出し、注射するという診療事象を再び演じた。このときに使ったのは聴診器であるが、§ 6の09で診察鏡に触れたことが医療事象のイメージを再活性化させたように見える。今回の内容は以前の診療行為とほぼ同じであるが、簡略になっている。

## § 8 腕章をめぐる会話など

■テキスト：(省略)

■概要：このセクションは、赤十字のついた腕章を見つけ、それがどう使うものであるかについてKとMが話し合った後(01)、遊びと関連のない話題(02)をはさみながら、またカップなどをいじる(03)というように推移した。

■解 釈：ここでの行動にふりの要素はなく、幼児らは探索行動と現実的な話題に関する会話に

終始したと言えよう。

## § 9 切符切りⅡ

■テキスト：(省略)

■概要：Mに対して「駅に行く?」と尋ねるKに、Mはいったん断るが、すぐに了承する。この後、自分が駅で切符を切る人だからというKの理由づけが続く(01)。それから、KがMに何か切符になるような物を渡し、お釣りに使う物をもらうといったことを経て、MにK(駅員)の所へくるように求めるといふ進行になる。MがKの方に来て、言われる通りに切符を出す、なかなか切りにくかったようで、切れるまで手間取る(02)。Kが切り終えると、今度はMの方が切りたいと申し出る。Kはもう一度切ってから切符切りを渡すが、このとき「切るの楽しみですよ」とか「切るの痛いですよ」と楽しそうに話す(03)。その後、Kが再び切符切りをし、紙くずか何かがたまったので「切るのはなしですよ」というが、Mは構わず切符切りを取り、切り続ける(04)。

■解 釈：Kは自分を駅で切符を切る人と設定し、Mに対しては駅に来て切符を出す人になることを求めた(01)。その後遊び道具の配分があり、Mがやってきて、Kが切符を切る。このとき手間取った(03)ためかどうかは分からないが、幼児らは以後演じるより切符切りで切ることに注意を集中してしまったようであり、共通の経験(切る)を楽しむ姿があった(03, 04)。

## § 10 レターをめぐる会話など

■テキスト：(省略)

■概要：Kはレターを封筒に入れようとして、手紙を書きたいと言い出す、レターを見て、すでにMが書いたというようなことを言い、Mに見せようとする。Mは以前からの切符切りを続けているが、ちらっとレターを見る。Kはレターを封筒に入れる(01)。この後Mの方から自転車に乗れたというような話が出て、自転車に乗る練習云々の会話をする(02)。一時Kから葉書が袋に入らないといった発話が出るが(03)、その後男児の声が聞こえ、その声は友達のHではないか云々の現実的な会話をする(04)。

■解 釈：Kが封筒に入れようとレターを見たとき、そこには既に何か書いてあったのであろう。それで「書いた、書いた、あなたが書いたわよ」といった発話が出たと思われる。これは遊戯的な雰囲気のある発話であるが、Kにそうした内容のふり遊びをする意図があったとは思われない。以

後の行動は現実的であり、ふり遊びの要素は認められない。

### § 11 跳び出すコイン

■テキスト：(省略)

■概要：Mが紙のような物を切っているとき(01), Kはコインをいじり、レジにふれる。するとコインの入った部分が音を立てて開き、コインが跳び出す。これが面白く、KはしきりにMに見ているよう訴えるが、Mは何かを切りながら「うん」と言うだけである。Kがなおも見てと訴え、あははと笑って応じる。Kはお金が跳び出したことをなおも面白いがる(02)。その後は、友達のすることについての現実的な会話になる(03)。

■解釈：レジが開くときに入れてあるコインが跳び出すということがあり、Kはこれを大いに面白がり、Mにも知らせるのだが、Mはおつきあい程度に笑っただけであった。Mは前からレジをいじっていたので意外な経験ではなかったかも知れないし、またコインの跳び出しよりも「切る」方が面白かったのかも知れない。それはともかく、Kの行動はレジを使った遊びなのであるが、ふりの要素は持たない感覚運動的なものであった。よって、このセクションにふり遊びはない。

### § 12 コーヒーⅡ, サラダ, パンなど

■テキスト：以下の「行動の記述 § 12」に記載。

■概要：KがMに「コーヒーを飲もうよ」と持ちかけるが、Mはまだ「切る」ことに興味があり「待つてよ」という応答である。これに対してKは立って、自分で飲む動作をしてから、遊びに

関連のない話題を持ち出す(02の①, ②) Mの口にカップをあて、ぐいっと飲ませてしまう動作に及ぶ。Mは「あー、うっぶ」と無理矢理飲むような反応を示してから、前に言いかけて中断した話題の続きを話す(02の③, ④)。Kは愉快になって笑いながら、Mの話に返事もし、Cにコーヒーを飲ませに行く。帰ってきて、またMにコーヒーができたよと差し出すが、これは下に置いておく。Mは、先ほどのことをまだ面白がっている(ここまで01)。この後、Kはレジに戻り、コインが跳び出す話をするが、Mも積極的な応答をする(03)。その後、Kは皿を棒でこねる動きを示し、これをサラダと設定し(04)、さらに、箱から出した恐竜をパンみたいだと言う(05)。(ここで実験者が立ち入り、観察は終了した)

■解釈：§ 5 でコーヒーを入れるふり行動が見られたが、コーヒーは飲まれないままになっていた。今回のコーヒーはそれ以来の復活であり、その続きを成している。なかなか注意を向けないMに対してとったKの行動は強引であったが、あくまでふり行動であって、意外性のある面白い経験となったようである(01)。途中、遊びと関連のない話題もあったが(02)、久しぶりにふり行動(サラダへの見立て)が出現したのは(04)、気分の転換があったからであろうか。Kのレジとコインの話に対するMの反応もより積極的であった(03)。Kが恐竜を出して、パンみたいだと言った時点ではさらにふりのイメージが広がることも期待できそうに思われた(05)。

### ◆行動の記述 § 2

MK……………「枠組づくりの出現」

#### 01 <人形>

○：人形を取り、Mに見せるようにして①「じゃあ、この子が風邪をひいちゃったのね」

○：レジのコインをいじっている様子で、低く②「うん」と返事

○：③「そして、寝ているんだ」

#### 02 <薬>

○：箱の中を探して、何か取り、Mに見せ①「何だこれ？」

○：②「薬」

○：薬を手前に立てて置き⑥「ここに立てて置いてるんだ」一隣にもう一つ取って置く

#### 03 <何か1>

○：①「これは何やるの？」

#### 04 <薬>

○：あれこれ置き①「お薬をここに置いておく」とつぶやく

#### 05 <水枕>

- ：①「ピンポーン」－②「水枕は××」と何かを戻す
- 06 <聴診器>
- ：聴診器をとり①「これさ、ここ、こう耳にやって」
- ：②「知ってますよ」
- 07 <体温計>
- ：体温計（推定）を持つ
- 08 <何か2>
- ：①「あのさ××Mちゃんちにしまつて」－②「待って待って、ここに置いておく」と何かする
- 09 <レジ>
- ：レジをいじって①「お金ある人みたい」
- 10 <お客さんと注射する人>
- ：①「Mちゃん、あのさ、Mちゃん、うそこにさ、うんとさ、お客さんと注射する人になって」
- ：②「うん」

## ◆行動の記述 § 3

MK.....「診療Ⅰ～演技の出現～」

- 01 <体温計>
- ：体温計をMに渡そうと①「はい」－②「あ、待って」と体温計を数回振り－渡し③「計って下さい、はい」
- ：受け取ってシャツの中に入れようとしながら「××」
- ：④「Mさーん」－⑤「まだ」－⑥「うそこにやるの」と体温計の向きを変えて渡し⑦「こうやるんだよ、こうやるの」
- 02 <聴診器>
- ：聴診器をつけ①「そして、待ってるんだ」－②「Mさーんて呼ばれたらね」－聴診器をつけ直し③「Mさーん、中へどうぞ」
- ：④「はい」
- ：⑤「6度7分です」－何か押す動作をして⑥「中にどうぞ」－⑦「中に来て」
- ：⑧「行っただの、いま」
- ：低い声で⑨「そう」－⑩「待って下さい」－聴診器が外れ易い様子で⑪「ちょっと、こうやって押えて」
- ：Kの耳の所を押える
- ：聴診器をMの腹部にあて⑫「ポン、ポン、ポン、ポン」－⑬「はい、いいですよ」－⑭「うしろ向いて下さい」（低い声）
- ：うしろを向く
- ：聴診器をあて⑮「ポンポンポン、ポンポンポン」－⑯「はい、出来ました」－⑰「待って下さい」
- 03 <薬>
- ：薬を渡し①「この、この薬を飲んで下さい」－②「はい」－③「この薬もね」
- 04 <皿>
- ：箱から皿を取り出す
- ：①「お皿」
- ：皿を見せ、低く②「これ友達の家にあるんだよ」
- ：③「友達のねー④ーうちにあるの？」
- ：④「うん」
- ：⑤「うん」とうなづく
- ：⑥「××ちゃんちに」

## 05 &lt;ポット&gt;

- ：箱からポットを取り出す
- ：①「それも？」
- ：②「うん」(否定調)
- ：③「それはないの？」
- ：④「うん」－⑤「これお湯ね」

## 06 &lt;注射器&gt;

- ：注射器を持ち、チラッとCを見てから、Mに向け①「注射をしますよ」
- ：②低く「はい」
- ：③「待ってください」－注射する態勢で④「どこ痛いですか？」－低く⑤「どこ？」－⑥「ここ？」－⑦「はい」と終え、注射器を置く

## ◆行動の記述 § 5

MK.....「コーヒー I」

## 01 &lt;箱の中&gt;

- ：箱をのぞく
- ：⑨「ねえ、Mちゃん」
- ：⑩「うん？」
- ：⑪「あのう、これ、コーヒー入れるか、ここに」－⑫「コーヒー」
- ：⑬「うん」

## 02 &lt;スプーン&gt;

- ：スプーンをKに渡す
- ：①「スプーン？」と受け取り－②「はい、どうも」－③「お砂糖も入れるんだ」とポットから何かすくってカップに入れる動作－④「これ、お砂糖ね、Mちゃん」－⑤「これはお砂糖ね」とMにポットを見せる
- ：箱を探しながら振り向き⑥「うん」

## 03 &lt;何か 1&gt;

- ：別のものを取って示し①「これは塩ね」

## 04 &lt;コップ&gt; (コーヒーカップと皿)

- ：①「コップもう〇いっ〇」とカップを渡す
- ：②「はい」と受け取る－05－入れたるかき混ぜたりの動作で③「これにお湯を入れて××」－④「お砂糖も入れてと」－⑤「かき回して」－出来た様子で⑥「コーヒー」と両手にもつ

## 05 &lt;ハウス&gt;

- ：箱からハウスを取る－06－箱から屋根を見つけ、本体部分にかぶせて①「あ、これでいい」－ハウスの中に一旦小ハウスを入れ、屋根をかぶせ②「これでいいんだよ」
- ：「今日さ」とカップを持ちながらMの方を見る

## 06 &lt;コーヒーカップ&gt;

- ：①「ねえ、コーヒーカップに乗ったことある？」
- ：ハウスに注意があり⑧「うーん、わかんない」
- ：③「ねえ、K子さあ、あのさあ、うーんと」

## 07 &lt;カップ&gt;

- ：Mにカップを差し出し①「ほら」－Cに見せるように「コーヒー」－Mに②「ほら、コーヒー飲んでね、あとで」と差し出す
- ：ハウスに注意があり③「ほら、見て、中を」とKにハウス内を見せる

## 08 &lt;箱の中&gt;

- ：Mに反応せず、箱をのぞいて①「ねえ、食べ物ないもんかね」②「た、べ、も、の」(4回言う)



○ : 箱の中を何か探す

09 <白柵と皿>

○ : 白柵を取り出し①「これしまっといてるんだ、このお皿に」

○ : 箱の中を見ながら②「うん」

10 <おはじき>

○ : おはじきを出し①「いいもの、いいもの、見つけ」

○ : Mの方を見る

○ : ②「あ、これ、おはじきだよ」とハウスに入れる

11 <皿>

○ : 皿をいじり「××」

12 <紙>

○ : ①「よいしょ」とまた箱を探し紙を見つけるが、ちょっと見て戻す(10分)

13 <何か2>

○ : ①「待って」と右手に移動し箱を覗く→何か箱から取り②「いいもの、いいもの、見つけ」→③「ほら、これも入れといたら」とMに渡す

◆行動の記述 § 7

MK.....「診療Ⅱ」

01 <聴診器>

○ : 聴診器を取り、つけ①「み、診るから、こっち向いて」

○ : Kの方を向く

○ : Mに聴診器をあて②「ボン、ボン、ボン」→③「うしろ」

○ : うしろを向く

○ : ④「ボン、ボン、ボン」→⑤「いいよ」と聴診器を箱に戻す→⑥「待って、まだですよ」

02 <薬>

○ : 診察セットの中を探り①「この、あ、この、そこの薬を飲んでれば直ると思いますよ」

03 <注射>

○ : ①「注射をしまーす」とMの腕に何かして②「はい、いいですよ」。

◆行動の記述 § 12

MK.....「コーヒーⅡ、サラダ、パンなど」

01 <コーヒー>

○ : スプーンで皿を叩く①「コーヒー飲もうよ、Mちゃん」

○ : ②「待ってよ」まだ切っている

○ : カップを持って立つ→02①→カップから飲む動作→02②→Mにもカップをあてがい、飲ませる仕草③「ギイー」

○ : 飲みきれない様子で④「あー、うっぷ」

○ : Cの方を見て笑い、笑いながら歩き回る→02③④→カップを持ってCへ行き⑤「コーヒー飲んで」と差し出す→Cのごちそうさまの声→⑥「うふふ」と戻る

○ : ⑦「勝手に入れるんだもん、ぶーって」→03→

○ : ⑧「Mちゃん、コーヒーできたよ」と差し出す→⑨「コーヒー、ここに置いておいてもいい」と置く

○ : ⑩「コーヒープーツて入れたりヒヒヒ」

02 <遊びに無関連な話題>

○ : ①「あのさ、バガボンの言い方面白いんだよ」

○ : ②「しもしも(しもしも亀よのメロディ)」

○ : ③「バガボンの言い方さ、しもしもめかよめかんさよ(歌う)って言うの」

○：④「変なの」

03 <コイン>

○：①「ほら、出来るよフフ」ーレジが開き②「お金か跳びだし××」

○：③「何でお金は跳ぶんだろうね？」

04 <皿>

○：「ねえMちゃん、サラダなんだこれ、サラダ、サラダ」と皿を棒でこね回す動作

05 <恐竜>

○：箱から恐竜を取り①「これ、パンみだいだな」～Dが介入し遊びは終了～

## 考 察

### 遊び内容の成立過程

今回現われた共同のふり遊びの内容は「診療する」(2回)、「コーヒーを入れて飲む」、「切符を切る」などになるが、「コーヒーを入れて飲む」は途中長い中断があり、全体としてのまとまりが薄い。また、「切符を切る」はふりをするというよりも道具(切符切り)を使う方に興味があった。これに対して「診療する」は、医者が患者に対して「診察し、薬を出し、注射する」行為を中心としており、幼児双方のふりへの集中が比較的高く、内容がまとまっていた。1回目の「診療する」について成立過程を見ると、まず遊び道具の探索が行われ、玩具の情報が蓄積されてくるにつれてふり行動も現れるようになり、それが相手の関心を惹いて共同のふり遊びとして成立する、という経過を辿っている(§1～§3)。これまでに報告した4つの事例で見出されたことが重ねて確認されたことになる。

### ふり遊びのための枠組構成行動の特徴

MとKは、ふりの内容を構築する際どのように相互交渉を行ったであろうか。ここでは「診療I」の構築過程を枠組構成の仕方という観点から検討してみる。一般にふり遊びは遊びの枠組を構成する行動と演技的な表現行動から成ると見ることができる。演技的表現行動が一般に何らかの遊戯的役割についてたまま行われる行動であるのに対して、枠組構成は役割についていない状態で行われる場合と役割についてた状態で行われる場合とがある(Giffin, H., 1984)<sup>1)</sup>。役割についてたままの枠組構成というのは、演じながらさらに演じるための状況づくりをするという微妙な行動になるので、年長になるほど多くなるのではないかと期待される。成人の会話では冗談を言うときにいちいち「これは冗談だけど」と断ったりしないのが普通である。話の流れをなるべく断ち切らないで新しい変化を

導入するのは発達的に成熟したやり方であるように思われる。

以上の観点から§2と§3の言語行動を説明してみると以下ようになる；§2の10は、KがMに役割配分を提案した行動であり、ふり遊びを行うための枠組構成行動にあたる。K自身の役割は宣言されなかったが、後続の進行から見て「医者が看護婦」であろう。これは以後のふり活動の展開に強く関連した行動として見逃せない。§3の01③はMが患者でKが医者が看護婦という枠組の中で意味をもつ行動であり、役割についてたままの発話であるから演技的表現行動の特徴を備えている。ここで使われた「体温計」はすでに探索され、「体温計」として認知されていたが、もしこの場面ですでに棒きれとしか見られていなかったものを差し出して「この体温計で計って下さい」と言ったのであるなら、それは演技的表現行動をしながら棒きれを体温計として設定しようとする枠組構成行動(Giffin, H.<sup>1)</sup>が深層の会話と呼んだタイプ)になるであろう。

次に、「診療I」に関連した部分を取り上げ、枠組構成行動の特徴にふれる。§2の10の枠組構成では、それが役割に入っていない「素」の状態で行われており、「うそこに」という語が使われていることに注目される。この「うそこに」は、英語で表現すれば Let's pretend ～に相当するが、正式の表明であり、はっきり現実の自分に立ち戻ってふり遊びの設定を行おうとする行動である。よって、それまでのふり行動の流れを断ち切るのも、演技的表現行動を続けることが面白い時期では、多用すると煩わしいであろう。この「うそこに」と類似したものとして「遊びで」がある。また、02の①「そして、待ってるんだ」に見られる「～んだ」という語や02の⑧「行ったの、今」の「～の」も同様の働きを示すと思われる。前者は「待っていることにしよう」、後者は「行ったことにしよう」という意味を伝える表現と解釈される。これらとや

や異なる枠組構成も見られた。§ 3 の01⑦や02⑦には演技指導というべき枠組構成、また § 3 の02⑫と⑬には効果音の付与と言うべき枠組構成行動が観察された。前者は言語行動が演技的動作を指示し、後者は言語行動が演技的動作（聴診器を当てていること）を説明するという機能を果たしており、いずれにせよ、役割を抜けないと実行できないであろう。

以上については § 2 と § 3 の「行動の記述」欄を参照されたい。枠組構成には実線で、演技的表現活動には破線で下線を引いてある。枠組構成と演技的表現活動の特徴を併せ持つ例は見当たらなかった。役割についたままの枠組構成行動はもっと年長になって身についてくる相互交渉技能なのであろうと推測される。

最後に、新たな問題を指摘しておきたい。それは、「～んだ」や「～の」といった表現は「うそこに」や「遊びで」といった表現と、また積木を指して「これはチーズです」といった表現や演技しながら枠組を構成する（前述した棒きれを即座に体温計に設定する）表現とはどう異なるのであろうかという問題である。特に、演技しながらの枠組構成はそれと純粹の演技との相違を明確にするという問題もある。もし、各種枠組構成行動を区別することができ、そこに相互交渉技能の成熟度が反映されるようであるなら、幼児の社会的ふり遊びをとらえる有益な尺度となろう。

以上については、枠組 (frame) と明示性 (explicitness) という二つの次元からふりに関わる相互交渉行動を捉えようとした Sawyer, R. K. (1997)<sup>6)</sup>の研究が注目される。Sawyer, R. K. は枠組、明示性とも4水準を区別したが、枠組の尺度は、発話者の言及が役割から出たものか否かと言及の対象 (事象) が遊びの枠組の中でのみ意味があるか否かを組み合わせたものである。明示性は、発話者の発話が聞き手の行動に対してどの程度の強制力を持つかを示したものである。例えば、第一人称での役割付与行動 (私はママ) は明示性水準が最低 (暗黙的で強制力が最小) だが、第二人称での役割付与行動 (あなたはママ) は明示性水準が二番目に高い (比較的明示的で強制力が高い) であるなどの区別を試みている。日本の子どもにも該当するかどうかの問題であるが、検討に値すると思われる。

## 結 論

■ふり遊びの内容の成立過程についてはこれまでと同様の結果を見たと言えよう。前回報告の年少児ペアにおいては、枠組構成において「素」の自分のままでの発話が非常に多いことを指摘したが、今回のペアにおいてもこの点では同様であった。役割についたままの枠組構成が遊びに熟達した子どもの特徴であるとする、このような行動は一般にはより年長で見られると推測される。

■社会的ふり遊びにおいて枠組の交渉を行う際に使用される特徴的な言語表現がいくつか見出された。それらは枠組を構成するという点で共通の働きを持っていたが、相手の行動に及ぼす効果という点では微妙に異なりそうであった。枠組構成のための言語行動が提案という性格をもち、遊び相手と今後のふりの方向を交渉するものであることを考えると、相手に及ぼす効果は重要な要因である。この点で注目されたのが Sawyer, R. K. の提案した (枠組と) 明示性という尺度である。

## 引用文献

- 1) Giffin, H. The Coordination of Meaning in the Creation of a Shared Make-Believe Reality. In Bretherton, I. (ed) Symbolic Play: The Development of Social Understanding. Academic Press, 1984.
- 2) 菅野幸宏 2名集団によるふり遊び過程の分析 (1), 弘前大学教育学部教科教育研究紀要, 26, 23-35, 1997.
- 3) 菅野幸宏 2名集団によるふり遊び過程の分析 (2), 弘前大学教育学部教科教育研究紀要, 27, 13-27, 1998.
- 4) 菅野幸宏 2名集団によるふり遊び過程の分析 (3), 弘前大学教育学部教科教育研究紀要, 29, 17-32, 1999.
- 5) 菅野幸宏 2名集団によるふり遊び過程の分析 (4), 弘前大学教育学部研究紀要クロスロード, 2 (Old Series 42), 27-40, 2000.
- 6) Sawyer, R. K. Pretend Play as Improvisation : Conversation in the Preschool Classroom. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers, 1997.

(2002. 1. 15受理)